

東アジアの中の日本と中国 ～卑弥呼・聖徳太子から福沢諭吉へ～

徳島大学総合科学部 教授
徳島県日中友好協会会長
葭森健介(アジア史)

昨年は日中国交回復45周年、今年は日中平和友好条約締結40周年に当たります。私たちは「国交」「国際」という言葉を使いますが、「国」と「国」の交わり、交際と言った場合の「国」とは何を指すのでしょうか？

日本人では明治まで「国」というと「阿波国」「讃岐国」と「国」を指していました。では「讃岐」と「阿波」が「国交」を樹立し、「国際関係」は改善した等と言うことはありますか？では今我々が使っている国、国家とは何でしょうか？皆さん日本史の授業をもう一度思い出して下さい。織田信長がスローガンとしたのは「日本布武」でしたか、豊臣秀吉が統一したのは「日本」でしたか？「天下布武」「天下統一」と教科書に書かれていたはずですが、つまり、すなわち、「国」の上にあるのが「天下」、江戸時代まで日本そのものが「天下」だったのです。

そもそも、「国」も「天下」も漢字、つまり、中国で作られた言葉です。それがどうして日本人が使うようになったのでしょうか。また、「国」とか「国家」という言葉が今我々が使っている意味になったのは、いつどの様にしてそうなったのでしょうか。これは現在の国際関係を解く鍵にもなります。ただ、それを明らかにするためには、後漢の光武帝から「漢委奴国王」の金印をもらった倭奴国王にさかのぼる必要があります。

中国は秦の始皇帝によって統一される以前は多くの「国」に分かれ、それぞれの「国」に「王」がいました。始皇帝は自らを「皇帝」(光り輝く神)と名乗り、自分が「国王」より高い地位にあることを表明し、「天下」を統治する者だと表明しました。この考え方は漢に引き継がれ、皇帝は「天下」を治める「天子」であると考えられるようになります。「天下」は「天」の下、地上の人間世界を表現し、全世界を指します。金印を贈った後漢の光武帝は倭も自分の「天下」の一部と考えたのです。

また三国志の英雄曹操の孫の魏の明帝は卑弥呼を「親魏倭王」に任命しました。「邪馬台国女王」卑弥呼も中国の皇帝の臣下の「倭王」となったのです。こうして日本の国際関係は中国を中心とする「天下」の一部に組み込まれる所から始まりました。

しかし、雄略天皇(ワカタケル・倭王武)の時に鑄造される鉄剣・鉄刀には「天下」(アメノシタ)、「大王」(オオキミ)の文字が刻まれています。すなわち倭の「大王」は各地の「王」を束ね、「天下」を治める存在である。中国の他に倭にも「天下」があると表明したのです。しかし中国に対しては「倭王」を名乗り、「藩」と称していました。この関係を覆したのが「日出処天子」と名乗り、



「日出処天子」(隋の煬帝)に手紙を送った聖徳太子(タリシヒコ)でした。漢の時代東アジアに「天下」は中国を中心とする一つしかありませんでしたが、唐になると中国も「日本」というもう一つの天下の存在を黙認するようになりました。

以後長い期間東アジアでは中国と日本の「天下」が併存してきましたが、西洋列強がアジアに進出すると共に「国家」(Nation・State)と言う概念も入ってきました。福沢諭吉はこの Nationality を「国体」と訳しました。明治以降我々は西洋の「国家」概念、すなわち国土と国民という発想で国際関係を考えられています。

しかし、東アジアに住む私たちの頭の中から「天下」の発想は払拭されているのでしょうか？ともするとそうした発想で東アジアの国際関係を見ていないでしょうか？領土問題、北朝鮮問題を考える上で、もう一度「天下」と「国家」の関係について考えて見る必要があるのではないのでしょうか？

総合科学部公開セミナー

第14回：7月27日(金) 18:30～20:00

対象：一般・大学生・高校生 参加費無料

会場：総合科学部1号館北棟3階 301講義室

事前申込が必要。駐車場の利用可。

詳細：総合科学部 HP

<http://www.tokushima-u.ac.jp/ias/>

申込み・問い合わせ先：

徳島大学総合科学部事務課総務係

TEL:088-656-9779

E-mail: sksoutmks@tokushima-u.ac.jp